

第9回 東邦大学看護研究会学術交流会を終えて

大会長 東邦大学医療センター大橋病院 森田 啓子

会員の皆様こんにちは

第9回東邦大学看護学術交流会は、340名という多数の看護職、看護学生の皆様にご出席いただき、盛会裏に終了することができました。今大会から優秀な研究に対して学術集会賞が新設され、26演題中4演題が表彰されました。残念ながら選出されなかった研究も身近な疑問をきっかけに、患者の安全・安楽を迫及した質的研究や新しい取り組みの成果等、興味深く甲乙つけがたい内容でした。参加者からも「他者の研究を通して新しい発見ができた」、「科学的に証明していくことの大切さを学んだ」、「病院間での情報交換の場になった」等、肯定的意見と同時に「聞きたい演題の発表時間が重なり残念だった」、「プレゼンテーションに工夫がほしい」等、改善を要する課題もいただきました。

特別講演では静岡県立がんセンター緩和診療科で心理療法士としてご活躍の栗原幸江先生から「対話がもたらす癒し」と題して貴重な体験を伺いました。ひるまずに対話を続けることにより、患者自らが自分との折り合いを見つけていく姿が生き生きと紹介され、参加者の心に響くものとなりました。

シンポジウムでは3名の講師からお話を伺いました。笠松さんは大学院での研究をベースに『患者の認知する「やさしさ」を成立させる看護の構造化』と題して、患者が認知する“やさしさ体験”は、看護師の懸命に看護する姿を通して形成されていたことや看護の専門的知識や技術によって構造化することができた等、興味深い内容でした。

小笹さんには「命に向き合うやさしさと厳しさ」と

題して遺伝子外来での助産師として出生前検診という難しい判断を迫られている妊婦・夫・家族との関わり方や究極の命の選択を余儀なくされる場面で求められているやさしさ・厳しさについて紹介していただきました。

吉田さんには「終末期の患者によりそう看護」と題して、緩和医療チームの看護師という立場から患者・家族の涙が求めていることの意味や、ただ傍らにいて「命」をありのままに受け止め、時間・空間を共有することで、患者は癒される等、苦勞して学び取った看護の一端を紹介していただきました。

各講師の体験談は英知に富み、まさに東邦大学の「患者によりそう看護」そのものであり、悩める私たちにたくさんヒントと勇気を与えていただけの内容でした。参加した皆様は、出来ることから既に実践していることでしょう。

次年度は東邦大学看護研究会から東邦大学看護研究学会に名称が変更になります。学術交流会も10年を迎え記念大会になります。切磋琢磨して積極的に研究成果を発表し交流ができるよう、ご支援とご協力を期待しています。「継続は力なり」です。研究結果を現場にいかしながら、看護を楽しみましょう。



特別講演に参加して

東邦大学看護学科 杉本 正子

講演前の打ち合わせ時に、先生の関心事が「終末期患者と家族（および遺族）」にしばられていった動機について伺った。それは先生のお父様のがん闘病に関することであった。お父様に告知はされておらず、娘である先生から見ても、終末期のお父様の気持ちは大変不安定なものであったという。そんな状況のある日、長年終末期ケアに携わっている看護職者にお父様は出会う機会に恵まれた。ほんの短時間の面接であったにも関わらず、お父様の心は嘘のように平安に満たされたとのことである。どのような会話がなされたのかは、講演の開始と共にはうかがうことは出来なかったが、お父様の心を落ち着かせ、死を覚悟できる気持ちにさせたことは間違いない。

病から派生する心への様々な揺さぶりは、容赦なく患者や家族を打ちのめす。その中で、対話を通して患者や家族の一筋の光になれば…と願う。そのために、先生はいくつかのスキルを具体的に示して下さいました。患者や家族を包みこむこと、すなわち抱えられているという環境の大事さ、患者や家族が「ゆだねられる」「つながる」という感触が持てる



ことなど。

看護職の立つ位置は、患者に最も近く、「看」の字のごとく手と目をもって患者と繋がることができる。恵まれた環境を生かして、患者と家族が安心して話せそして癒される看護職でありたいと思う。講演後の交流会にもご参加いただき、会員との交流を楽しんで下さいました。先生の益々のご活躍を、会員一同祈っています。



学会の風景



シンポジウムを終えて

医療センター大森病院 伊東 和子

第9回東邦大学看護研究学術交流会は大橋病院が主として企画担当し開催された。今回のメインテーマは看護の究極の目的である「命によりそうこと」の意味を共有したいという意図で、『看護の本質—本当のやさしさってなんだろう』であった。私は学術交流会の最後の楽しみでもあるシンポジウムの座長を、看護学科の高橋正子さんと担当した。3名のシンポジストには「心によりそう看護を目指して」というテーマで、虎ノ門病院の笠松由佳氏から調査研究から導き出した患者の認知する「やさしさ」と看護の構造化について、東京医科歯科大学生命倫理研究センターの小笹由香氏からは遺伝子診療外来での体験から「命に向き合うやさしさときびしさ」を、大橋病院緩和ケアチーム看護師の吉田小百合氏からは「終末期の患者によりそう看護」について、熱く語っていただいた。看護師であれば誰もが関心の高いこのテーマに、どのシンポジストのスピーチからも唸るような感動を得ることができ、思わず座長の役割を忘れ



てしまうほどであった。会の終了時間が切迫した中で、少しでも参加者と共に有意義に過ごしたいと心配して打ち合わせた企画もよそに、会場からの質問に各々のシンポジストが活発に応答された。そのことは参加者に『本当のやさしさってなんだろう』をさらに深く考える機会を与え、感動の気持ちを抱きながら会を終了することができたのではないかと感じている。



学会の風景



「第1回学術集会賞」



東邦大学医療センター大森病院 手術室 曾原 沙弥佳

当院手術室では、患者誤認・手術部位間違い防止のためにタイムアウト・マーキングを導入し、その取り組みについて今回の学術交流会で発表した。実際に導入後、誤認を発見することができ、重要性を実感している。このように日々の業務で行っていることが今回の受賞にもつながり大変であったが嬉しく達成感を感じている。

今後も更なる患者誤認・手術部位間違い防止対策を考え実施することで、患者様に安全な手術看護を提供していけるよう努力していきたい。

東邦大学医療センター佐倉病院 ICU 林 裕子

記念すべき第1回学術集会賞を受賞し、とても嬉しく思っています。日頃より医療者が作り出す音がどれくらいの音量で、患者が気になるものかということに疑問を抱いていた。本研究は先行研究を引きついで実施し、その基盤となった先行研究がなければ導きだせなかったものです。日常業務の中でのちょっとした疑問を看護研究として取り上げてみると、新たな発見があり、楽しく研究に取り組むことが出来ました。



東邦大学医療センター大橋病院 6階西病棟 大久保 明奈 増木 菜美子

この度は学術集会賞を頂き有難うございます。自分達の研究が賞を頂けるとは予想外で、とてもびっくりしました。大橋病院小児科病棟は、外来との一元化です。その特徴を生かし、アレルギー外来で、アトピー性皮膚炎児の家族へのスキンケア指導の研究を行いました。スキンケアについて皮膚状態の写真を入れ重症度別にケアができるよう工夫し、見やすいシンプルなりーフレットを作成し効果が得られたと感じています。

今後も研究を生かし、家族への指導を充実させていきます。

東邦大学医療センター佐倉病院 看護相談室 角川 由香

この研究は2008年6月佐倉病院に新設された退院支援部署・看護相談室の活動概要と今後の課題についてまとめた。新しい部署の立ち上げと同時進行で行った研究でしたが、寺口看護部長の研究に対する理解と暖かい応援により、ここまで仕上げる事ができました。現在、文部科学省科学研究費補助金(若手研究A)へも共同研究者として参加しています。今後も、広い視野で退院支援研究をしていきたいと思っています。



編集後記

来年度は第10回の記念となる「東邦大学看護学会」の準備が、着実に進められています。研究会から、学会へと大きく飛躍する年です。皆様もぜひ、ご参加下さい。

担当者

ニュースレター事務局

東邦大学医療センター佐倉病院 看護部 看護管理室
千葉県佐倉市下志津564-1

TEL 043-462-8811 (代表)